吉林城東の摩崖文字

園田一龜

1. 明初の遺跡

吉林城の東南・阿什哈達（アシハダ）に在る明初の摩崖文字は、今を距ること約五百三十年前の遺物である。大體明代の史蹟に乏しい滿洲においては、明代隨一の史蹟として、明朝初期の東北經略を物語る無二の紀念である。然しながら一般の人々は、阿什哈達に摩崖文字の存在することを知らない。否たとえ、その存在を知るも、これに對する歴史上の知識を缺くの實狀である。然らば阿什哈達にある摩崖文字とは、果して如何なるものであるか。世人は全くその眞價を知らない。私は今から約二十年前、當時滿洲國政府文教部の委囑を承けて北滿地方の史蹟調査に從事した關係から、前後二回、嚴寒と炎暑の候、史蹟阿什哈達を訪れ、摩崖文字に就いて詳細に調査したことがあつた。それが今や時代の變遷は日本人の滿洲撤退に伴いこの史蹟も將に堙滅に歸する虞れなしとしない。されば私は阿什哈達の摩崖文字に就いて私の見聞と歴史的事實を語り、是を記錄として後世に傳へんと欲する。

2. 阿什哈達の名稱

阿什哈達は松花江の上流に在り、吉林城を東南に遡ること約十二華里の江岸にあたり、所謂摩崖文字は松花江の右岸に突

起した巖山の巨石に刻まれたものである。いま行政地域は吉林省吉林縣大阿什哈達村に屬している。吉林通志（金石志）に。

阿什哈達摩崖　在吉林城東十二里。江邊。

と刻した文字に該當する。

されば摩崖文字の位置する山水の形勢を觀るに源を遠く長白山に發して北流する松花江の水は、此處にありてL字形に左折曲流し、吉林方面に向つて西流して居る。彎曲部の底邊に密集した巨石群の巖山卽ち阿什哈達である。

元來吉林城から上流に遡り、阿什哈達に至るの間、松花江の兩岸は大體平坦の土地である。阿什哈達から上流に遡れば、兩岸の山峯著しく聳立し、時に斷崖絕壁を呈するものであり、前に此處に豐滿ダムが築設された所以である。阿什哈達の山峯は崔嵬たる奇巖怪石層層相重るところに在り、下は江水のよどみて淵となり、碧潭千尺、藍を湛え、遠山近く眉間に迫り、江水東南より來りて西に流れ、風光明麗、その山容水相、眞に吉林隨一の景勝と申すも敢えて過言ではあるない。問題の摩崖文字は、この山峯の中腹と西邊の下部にありて二個所に分れ、多年の風雪雨露に暴露して文字は太半摩滅剝落して居る。まづ阿什哈達なる地名に就いて考察するに阿什と謂い、哈達という。之は普通に呼ぶ中國語の地名ではない。阿什哈達の文字は、音をあらわすための借字であり、漢字としての意味は含まれていない。阿什哈達は恐らく女眞語（淸代の滿州語）であろう。第一に哈達（ハダ）と申すことは女眞語にて「山或は峯」を意味する。因つて阿什（アシ）もまた女眞語に相違ない。然し阿什なる言葉には見えない。そこで阿什は之と類似した言葉の轉訛であろう。「阿什」の語と最も類似した言葉として Ashiha（やゝ小さい）がある。いま阿什哈達の形狀に照すに、此處は古く女眞語にて Ashiha hada（やゝ小さき山峯）と呼んでいたものが、何時の頃よりか Ashihada から ha の一音だけ脫落して發音するに至り、之に對し、阿什哈達の漢字をあてはめたものであろう。北流する松花江の江水が、此處にて西方に向つて直角に轉流するところ、殆ど孤立狀態にある山峯が阿什哈達

である。因つて附近の山嶽に比較し、「稍や小さき山峯」という意味を含めてアシハ・ハダの名をもつて呼ばれていたものであろう。それが現今のやうに、アシハダと語尾を詰めて發音するに至つたものと信ずる。

3. 摩崖文字の內容

さてこの阿什哈達の摩崖文字を、始めて天下に紹介したものは、吉林通志であつた。是によつて松花江の上流に阿什哈達の山峯あり、その一角に明初の摩崖文字が殘存していることが明かになり、內外學者の均しく注目するところとなつた。卽ち吉林通志（卷一百二十・金石志）に、

奉天遣興孔兵馬陣前將軍遼東郡同都指揮劉　書
丁未十八年　領軍至此。
洪熙　元　年　領軍至此。
□□　七　年　領軍至此。

と記し、且つ「字四行多刓缺」と載せ、この文字に對して若干の考證を附して居る。

右の如く吉林通志は、從來全く未知の摩崖文字を世に紹介したる功績は多大であつた。しかし今日から之を見れば通志に記された摩崖文字はその實物と比較し甚しく誤讀に滿ち、史料としては全く價値がない。その考證の如きも全く無意義である。しかも吉林通志は摩崖文字の所在を單に一個所に限り紹介せるも、實は二個所であつた。永樂十九年と宣德七年の二回にわたる摩崖文字であつた。それが摩崖の年月を異にするも、俱に同一人の摩崖であることに注意したい。

Ⅰ　第一摩崖（永樂十九年正月）

松花江の江水、曲流してよどみ、深淵を形成するところ、水際から約三十尺の高所、重疊した巨石に南面し、

甲辰　大明　癸丑　□　□
驃騎將軍遼東都指揮使　劉
大明永樂拾玖年歲次辛丑正月　□　□　□　□

という大文字が刻まれて居る。この摩崖文字は吉林通志には全然逸脱して載錄していない。之が尺度は中央の題名十一字が、最も大きく高さ四尺四寸五分一字の大さ四寸平方である。摩崖の表面は著しく風化し、苔花密生し、その文字に甚しく鮮明を缺いている。

Ⅱ　第二の摩崖（宣德七年二月）

この摩崖文字は、即ち吉林通志に載する所のものである。第一の摩崖から西方に距る約二十間あまりの江岸に位置する巖山の西寄り、三塊の巨石が積重り、あだかも石柱狀を呈する下部の南面の全文七行の文字を見る。

通志に四行とあるも、完全に誤讀である。文字の周邊に線を劃し、上部は圓く、下部は方形をなし、その最上部は地上一丈、その底邊において地上六尺の高さである。石質は花崗岩にして風化作用著しく剝落甚しきも、なお次の文字を判讀し得るあり、史料としての價値は充分である。

この摩崖の尺度を測るに、中央部において高さ四尺、西側三尺六寸五分、幅員上部一尺九寸、底邊二尺五分である。是を以て吉林通志の所記と對照するに、通志の編者が如何に甚だしき誤讀をなしていたかを證明するであろう。この摩崖文字に

よつて、遼東都指揮使劉清が、永樂十八年、洪熙元年、宣德七年の三度、軍を率いて此地に來り、當時黑龍江の下流に居住

欽委造船總兵官驃騎將軍遼東都司都指揮使　劉　清
永樂十八年　領軍至此。
洪熙　元年　領軍至此。
宣德　七年　領軍至此。
本處設立龍王廟宇永樂十八年創立
宣德　七年　重建
宣德　七年二月吉日

していた野人女直に對する前後三回の遠征を紀念して、この巨石を利用して摩崖せしめたことが知られる。

思うに驃騎將軍遼東都指揮使劉清は永樂十八年、第一次の奴兒干遠征時此處に至り、龍王廟を創建し、宣德七年、第三次の遠征時に更に龍王廟を重建したことが分明する。しかも第三次の遠征時には、造船總兵官をも兼任し、此處に東北經略に必要なる船艦を建造せしめたことも明白である。このとき劉清は、造兵運糧の兵站本部司令官であつたことを知る。この摩崖文字は劉清によつて築設された龍王廟の創建と重修とを記念したものであつた。

4. 摩崖文字の歷史

然らばこの摩崖文字に對する歷史上の事實は如何。正史は果して之と符合するであろうか。之れ摩崖文字の史的價値を左

右する重要なる問題である。因つて之を明朝初期の正史に比較對照するに、之れ亦完全に符合する。史を按ずるに成祖治世の永樂年間及び宣宗時代の宣德年間、明廷は屢々兵を黑龍江の下流に用い、野人女直に對し、征服綏撫のことを實行した。所謂明朝の東北經略であり、かの有名なる奴兒干都司の如き、夙に永樂七年に設置するところであり、宣德三年再度設置のことあり、此間東北經略のこと一進一退の消長あり、之に伴い松花江造船の事業にも相當の消長盛衰があつた。

そも〳〵遼東都指揮使劉清の名が、大明實錄に見ゆるのは、宣德七年五月の條に始る。彼が永樂十八年、洪熙元年の再度此地に遠征し來つたことは確實である。卽ち大明實錄宣德七年五月丙寅（九日）の條に、

丙寅。以松花江造船軍士多未還。勅海西地面都指揮塔失納答。野人指揮頭目葛郎哥納等曰。比遣中官亦失哈等。住使奴兒干等處。今都指揮劉清。領軍松花江造船軍粮。今各官還朝。而軍士未還者五百餘人。朕以爾等。歸心朝廷。野人女直。亦遵法度。未必誘引藏匿。勅至。卽度尋究。遣人送遼東總兵官處。庶見爾等歸向上誠。

とあり、この記錄は、劉清麾下の遠征軍隊を撤退するにあたり、野人女直が明軍の將兵を抑留した事件に對する勅諭である。從つて遼東都指揮使劉清が、松花江における造兵運粮を擔任した事實を證明するものである。阿什哈達の摩崖に劉清が「欽委造船總兵官驃騎將軍遼東都司都指揮使」と署名していることの僞りでなかつたことを知る。明廷の東北經略は成祖の崩殂に遇つて一頓挫を來し、更に宣宗の長逝によつて完全に斷絕し、空しく龍頭蛇尾に終り、女眞人の抬頭は、やがて淸朝の勃興となつた。この劉淸は當年三度此地に遠征し來り、最後には兵站本部を支配し、その總指揮官を兼任し、造船、運糧の重責にあたり、全力を注いでいたこと明白である。

5. 劉清の閲歴

然らば劉清の閲歴は如何。彼が阿什哈達摩崖文字の本人である以上、その爲人を知ることも、また必要である。されど劉清に就いては明史にその傳を見ない。たゞ大明實錄正統七年二月庚申（二十九日）の條に、

遼東都司都指揮使劉清卒。清和州人。以富峪衞千戸。從太宗渡江有功。陞山東都指揮僉事。復以征交阯功。陞陝西都指揮使。坐事謫戍遼東。尋復職。轉遼東都司。未幾出巡失利。謫戍甘州。尋復官。至是卒。遣官賜祭。清慷慨有才略。馭軍嚴整。處已儉約。然與人寡合。累經挫衂。跲而復起。勁直瀕老不衰云。

と記され、略ぼ其の爲人を窺うに足る。即ち劉清は和州（今の安徽省和縣）の人。富峪衞千戸たりしとき、太宗（成祖）靖難の師に從い、長江を渡りて功を樹て、山東都指揮僉事に陞る。次で復た交阯征討の軍事に勳功を樹て、陝西都指揮使に陞進した。その在任中、事に坐して遼東に謫戍された。尋いで復職し遼東都司に轉じた。これ恐らく永樂廿六、七年の頃であろう。このとき明廷の東北經略は三度實行されたものと信ずる。劉清が松花江における造船・軍糧の重任を掌握したのは、此秋のことであろう。劉清としては、恐らく此秋こそ彼の一生を通じ最も得意な時代であつたであろう。されば阿什哈達の摩崖文字は、彼が得意時代の所產であり、この摩崖文字によつて劉清の名は萬古不朽に傳るものと申さねばならぬ。

されど彼は長く得意の位置に坐することを得ず、宣德十年四月、松花江上における野人女直との軋轢によつて遂に罪を獲て獄に下り、次いで甘州に謫流された。「未幾。出巡失利。謫戍甘州」とあるのはこの事である。彼が下獄の理由としては、大明實錄宣德十年四月辛酉（二十日）の條に、

辛酉。太監阮堯民。都指揮劉清等。有罪下獄。初堯民同清等。督兵造漕舟於松花江幷捕海青。因與女直市。輒殺傷其人。

女直衒之。堯民等徵回京。女直集部落。沿途攻截。騎卒死亡八九百人。鎭守遼東總兵官巫凱以開。詔械堯民等下獄。鞫之。

とあり、劉清等の罪は、罪にして罪に非ず、その責任を問はれたものである。卽ち松花江遠征の將士が野人女直人との交易に衝突し、之を殺傷したことに發端し、野人女直の反感を招き麾下の將兵八九百名が野人女直人のために沿途襲擊を蒙り殺害された。この結果、劉清はその責任者の一人として鎭守遼東總兵官巫凱の上奏彈劾をうけて獄に繫がれたのである。

越えて翌年（正統元年）六月に至り、劉清等は死一等を減じて甘肅に謫流された。大明實錄正統元年六月庚戌（十四日）の條に、

庚戌。謫遼東都指揮使劉清等戍邊。清等領官軍。護船料糧米。往松花江。爲女直人所掠。法司擬死。并追其糧料。而清等貧乏無徵。上宥之。命戍甘肅。

とあるなり。甘肅謫戍のこと分明する。糧料の損害に對する賠償金は、劉清等が貧乏によつて徵收の方法なきものとして之を免除されたのである。劉清に甘肅に謫戍された後、また復官したが、正統七年に至り、遂に死亡するに至つた。

6. 數奇なる生涯

思うに劉清は明朝の成祖朝から宣宗朝にかけて奴兒干遠征に從事して少からぬ功績があつた。殊に最も困難なる兵站本部の首腦者として勞苦を重ねながら、是が代償としては反つて邊境謫戍の罪であつた。彼も亦數奇なる運命をたどつた武人である。彼は爲人、慷慨にして才略ありしこと。幾度か蹉跌し、また擡頭した所以であろう。以て其の爲人を想像することが出來よう。なお遼東都指揮使劉清の名は、阿什哈達摩崖の外に、奉天省海城縣城內の三學寺址に殘る宣德十年の重修碑に彼

の名が助捐者の筆頭に鐫刻されている。これは總兵官巫　凱が上奏彈劾以前のことに屬し、劉清が當時遼東に在任したことを立證するものである。斯樣にこの阿什哈達の摩崖文字は單に一劉清の記功文字たるに留らず、歴史上においても明初の東北經路を記念する好文字である。明廷が永樂・宣德の間、滿洲東北地方の未開民族を招撫するために兵を用いた一證である。是に因つて當時の阿什哈達附近は松花江の下流に居住した野人女直に對する用兵上の根據地であり、且つ造船運糧の兵站本部が置かれていたことが分明する。この事は清朝の順治年間、**ロシア**の東漸に對抗し、今の吉林に船廠（造船所）を設け、盛んに船艦を造り、松花江上、ロシアの艦隊と擊戰したことあり、此處が造船の好適地として古今軌を一にして居る。

然して阿什哈達の摩崖と關聯するものに奴兒干・永寧寺の碑がある。この永寧寺は永樂十一年、奴兒干都司が設立された黑龍江口に近き**チル**（いまゾ聯領の沿海州）にあつた。明廷の勢力が光被した滿洲の最北端であり、此處に永樂十一年及び宣德七年の年號を刻した二碑があつた。之が阿什哈達の摩崖文字と最も密切な關係があつたことは否み難い。この二碑は、いまや浦鹽博物館からハバロスク博物館に移し保管されて居る。かくの如く阿什哈達の摩崖文字は明初の東北經略を記念する史料である。吉林としては唯一無二の明代史料なる事を天下に誇るべきことを斷言する。（昭和十一年六月の日記抄錄）

（東洋文庫員）

註

園田一龜滿州金石志稿（第二册）

1　浦鹽勅修奴兒干永寧寺碑

2　吉林阿什哈達劉清題名

3　吉林阿什哈達摩崖文

4　浦鹽重建永寧寺碑